

在りし日の人

天翔ける歌の調べは在りし日の人も景色も蘇らせし

茉莉花

舟型の古き豎琴歌ひだす魚の音符の虹のロンドを

真奈

もがり笛岬の外れに飛ぶしぶき中に虹見ゆ冬の海かな

弁慶

笛なれば悲鳴あげよと北風が荒れてひねもす富士に波立つ

蘇生

シベリアの荒野に生(あ)れし風ならん高圧線を暗く哭(な)かせる たまこ

たまこ

シベリアの風吹きつける富士山頂雪の煙は東へたなびく

弁慶

富士山に蜜柑をひとつ置いてみた哭(な)いてる雪にそれは映えたさ

海月

氷ノ山下ろしの吹雪に晒されて木守り柿の実の清冽な赤

たまこ

ふる雪に木守の柿の実赤々と梢に残れり故郷の廃家

弁慶

万両の赤きが消えぬ庭の隅いづれも鳥の餌となりつべし

蘇生

はやみかんしなびてきたよこたつのうえのかしざらことり

海斗

枯枝に蕾のありて紫陽花の地の温りに「嘗為」が浮ぶ

海月

櫻木のいまだ花芽は固けれど樹皮黒々と輝き初むる

蘇生

杉並の泉湧き出る井ノ頭あふれし水は花の墨田へ

弁慶

古のここに山城ありつべし谷(やつ)尽きる辺に泉湧きをり

蘇生

城落ちて雑兵奔る切通し夢幻のなかに寒木瓜が咲く

海月

鎌倉は疎開の地なり今もなほ機銃掃射の耳底の音

真奈

夕立はみぞれ混じりの北鎌倉我は駆け込む女寺かな

弁慶

東慶寺いまでも欲する女あらむアジアアフリカ搾取さるる地に

茉莉花

未枯れの岩根たどりて化粧坂そり下りて古きを思ふ

蘇生

暗かった三月十日そこだけが明るかったな友のいた町

海月

色秘めつミモザの蕾ゆれをりて風に色あり空に色あり

蘇生

固く合わす阿修羅の御手になに籠めし色即是空空即是色

茉莉花

国問わず母親達はいとし子を育てむとして阿修羅のごとく

弁慶

願ふのは子らを羽ぐるめ喜びの春ひらくのはこの子らなれば

海月

初めての保育園より帰宅して寝息たており小さき大の字

千種

寒晴れに嬉々と戯る下校子の未来にしかと幸あれよかし

蘇生

ランドセル背負いくぐりし校門も廃校ゆえに人影もなし

弁慶

廃校のわが新制の中学校会へば高らか校歌斉唱

真奈

親に親子に子が無きをけふも読む廃れた末に何方で逢ふ

海月

身体も髪膚も父母に賜りしことを忘れぬ人で有りたし

弁慶

いとほしき吾妹は疾うになきものを今もうつつに見ゆる面影

冬扇

木枯らしの音を聞きつつ眠りたる昨夜の夢に君あらはれぬ

たまこ

白梅の花の遅きを待ちわびし夕べの夢のけさの正夢

蘇生

夢ならば早く覚めたし冬桜抱へて行けり病む人の辺に

たまこ

昨夜見し夢は真冬の陽だまりの筵の上で花いちもんめ

弁慶

二月来て百韻詠みし昨春の春さりてなる発句を思ふ

蘇生

年々に日の過ぎゆくは速くして詩心探るこの一年なり

茉莉花

大切なページに栞をはさむやうに歌はむ気泡のやうなわが歌

たまこ

如月の日差しが机上明るくす我が愛読の栞を繰りぬ

しゅう

音楽と活字に浸るサ店隅わがオアシスの時の充ちたる

真奈

喫茶店の店先自転車立てかけてひと隅占める詩人のノート

しゅう

見渡せば一つだに無き喫茶店鄙びた街のすたれ行くさま

弁慶

スタバーの若者集くその奥で小さき本のページをめくる

蘇生

ハンセン病文学全集無名の作家綺羅星の如き詩歌を遺す

しゅう

賑はひし店に二冊のフィクションふしぎの世とぞ思ふはやわが

蘇生

フィクションにはあらず橋の無き島に病み歌い続けし明石海人

たまこ

子の死まで葬り終えて知らされし悲嘆絶唱海人憐れ

しゅう

ふしぎの世とぞ思ひしは芥川賞なるものを受けしフィクション

蘇生

梅に梅・桜に桜の咲くことの不思議ではないこと不思議さ

たまこ

アリスてふ不思議の国の少女いて春来るらし雨も上りて

海月

女王のその教訓は左の通り「自分に厚く他人に薄し」

弁慶

若者は大人の厚さ忌みるかな自虐のような「蛇にピアスを」

しゅう

襟に顔を埋める癖は止めにせむ薄手のコートに替へて立春

たまこ

雨たへて臙に明くる日の光けだるく白き春の色なり

蘇生

梅桜菜の花咲くとの記事ありて疑いもなき今日は立春

弁慶

春立てりこの青空に春立てり母洗ふ父の背の細きこと

海月

春分の昼の綿雪ほのぼのと父母の愛のごとくに積もる

たまこ

春が来たイーストリバーの岸に立つ煙突四本おしゃべり止めず

ぼぼな

立春の賑わう夜空見上げれば真珠を抛り上げたような月

しゅう

アーモンドのかたちの月が浮く夜を二人で語る転生のこと

たまこ

肌白く乳こぼしたる聖母あり深き井戸より星語るらむ

奈都

かの人と乳白色の霧の中彷徨い歩きし尾瀬のぬかるみ

弁慶

つやつやし緑が原の木道を池塘眩しく黙々歩く

しゅう

春立てば二本の塔が立ち上がる二本の塔を亡くした島に

ぼぼな

暖かき日もあり寒き日もありて春の初めの天のいたずら

弁慶

二三分に咲き出す梅の冴え返り肩抱かれたる花心かも

しゅう

月光のソナタを浴びるきみの背(せな)振り向きたまえ花芯つつもつ

海月

雪深き出雲の旅より戻りきて月光青き駅頭に立つ

たまこ

駅前の花舗の明るき灯に吸われヒヤシンス買う春待つ心

しゅう

目くるめく代はりゆくゆく仲通りそこは春なる丸の内なり

蘇生

丸の内の一丁目ロンドン赤レンガビル失せしよりはや99年

弁慶

霜枯れの鳶のからまる赤レンガ博物館に人影もなく

たまこ

暁闇にほとほと胸を叩きおり濃くなる影は春の兆しや

海月

ほとほとと扉叩かるけはひして問へば群雲隠れなるかな

紅

仙境に埋もれるさまに日向ぼこ寝るではないと聞す群雲

蘇生

松林の向こうは多分海だろう光りつつ沸く冬の雲あり

たまこ

何気なく仰ぎてみると雲間にはひそかに春を孵す兆しが

蘇生

寒林の静寂の中に身をおけば姫沙羅の枝に春は兆して

弁慶

兆さんか兆すやろかい一片の春は塹壕深くしており

海月

明日香村棚田の上の陵の森のははそぎ春めきてあり

弁慶

鹿島神宮常陸の国の一ノ宮春は名のみ森の神霊

しゅう

砂浜に若布干したる浜すだれ名のみ春の風の冷たき

蘇生

壇ノ浦波に漂う若緑波の下にも春はさぶらう

弁慶

梅が枝を箆に挿して戦ひし若き武者あり一の谷には

真奈

遥かなる古戦場のうえの大橋の白波眩し後部座席かな

しゅう

この春の疾風一番くるらしと違ひたるかや沖は白波

蘇生

春一番心して吹けおみなごの黒髪乱すことはゆるさじ

弁慶

調へし髪は乙女の気色なむ見初む裳裾は許されよかし

蘇生

春の名を告ぐるミューズの脛白く七色の谷駆け抜けてゆく

真奈

久米仙人白き脛を見て墜落す色香に迷うは人に限らず

弁慶

十五坪の庭に森羅万象の仙人のような老画家熊谷守一

しゅう

敦盛草少し隔てて熊谷草花を眺めて平家を偲ぶ

弁慶

舞殿をけみし続けて千年の銀杏古木に静をおもふ

蘇生

石の辺の猫によりそう露の臺おおきな背伸び銀杏越さんと

海月

美容院のつよい香りを身に纏い恋猫の鳴く家に戻りき

しゅう

月見夜に命のかぎり涼み虫いづくに消えし秋の夜はもう

泉情

立春も初午も過ぎ梅も咲く春の楽園永久にあれかし

弁慶

立春の月の夜です「！」「をいつぱい散らしてメールを送る

たまこ

「！」「きらきら舞うよ宙高く銀河鉄道たんぽぽ便です

海月

桃李和歌連作百首歌集

第五四〇一首より五五〇〇首迄

平成一六年一月二一日より平成一六年二月一八日迄